

東日本大震災被災者の「共助」で知るコミュニティの力

マンションコミュニティ研究会 宮川智子

1. 三陸地域の伝承「津波てんでんこ」から学ぶ

「てんでんこ」とは、東北地域の方言で「でんでんばらばらに・・・」との意味。津波が来たら親も子もかまわず真っ先に自分だけで逃げろ、自分の命はまず自分で守れ、共倒れの悲劇はくりかえすな・・・という伝承で、沿岸部の人たちに根付いている防災意識です。

釜石市の津波防災カリキュラムの避難3原則は、【①想定を信じるな。②どんなときでも最善を尽くす。③率先避難者になる。】で、この原則を実践し多くの人々が助かりました。

自分も家が流出するなどの被害を受けながら、避難所に駆け込む人々に手を差し伸べ、支援を続けた三陸沿岸部地域の女性たちがいました。消防団の後方支援組織「婦人防火クラブ」員たちです。私は、この方たちの活動を調査致しました。

炊き出しや物資配布、安否確認、情報連絡の他、避難所の円滑な運営や在宅避難者への生活支援まで、地域で共に生きる者として心温まる共助の活動の源泉は、昔から地域に伝わる「結いのこころ」です。

地縁コミュニティ「結い」は、地域にとって重要なインフラですが、近代化、高齢化、過疎化、女性の社会進出、都市化が、「結い」の危機を招いている現状もあります。災害時の「自助」と「共助」について、東日本大震災被災地での事例をお話いたします。

2. 地域の防災力＝地域のコミュニティの力

災害発生直後の災害救助・支援の遅れに対し、法律・制度・行政・公共サービス等のすき間を補うために、東日本大震災では地域コミュニティ(結い＝ボランティア)が機能しましたが、都市型災害では、どのようにコミュニティ力が発揮できるか・・・都市生活者や団体・企業などの多様な組み合わせによる協働型の「現代版結い」が求められます。マンションはマンション居住者の防災だけでなく、地域コミュニティの一員としての位置づけもあります。

3. 参画意識の醸成へ

東日本大震災発生以後、被災者だけでなく多くの人たちにとっても、生き方や暮らし方への見直し機運が高まっています。こころの通い合うコミュニティを作るには、自らがかかわっていくことで新しい関係を互いに築き、共に助けあう意識の醸成が求められます。

今までの「参集型のコミュニティ」から、かかわりあい・深めつつ・担いあう「参画型のコミュニティ」を作っていくための「参画技法」を紹介いたします。問題点抽出・解決策立案・実践へ、主体的に参画するためのプログラムです。